

SHODENSHA
SHINSHO

鶴光太郎

性格スキル
人生を決める5つの能力

祥伝社新書

はじめに

「人生100年時代」という言葉がちょっとしたブームを呼んでいる。震源地は、リンダ・グラットン他著『ライフシフト—100年時代の人生戦略』（東洋経済新報社、2016年）だ。安倍政権もグラットン氏をメンバーに入れた、「人生100年時代構想会議」を立ち上げ、政権の新たなキーワードである「人づくり革命」について検討を行つてゐる。

人生100年時代においては、高齢者でも健康な人々が増え、就業も70歳はおろか80歳まで見据えることができるようになる。昨今の技術革新のスピードの速さを考えれば、大学までに学んだ知識などはどうに陳腐化してしまう。いくつになつても年齢に関係なく、学び続けることが重要だし、機会をみつけ、本格的な学び直しを行うことが必要になつてくる。リカレント教育（生涯にわたつて教育と就労を交互に行う教育システム）のあり方が政府でも検討されるゆえんである。

しかし、我々は何を学び直す必要があるのか。それは、学校の教室で先生から一方

的に伝えられる新たな知識であろうか。単に知識の蓄積とその引き出しだけで行う仕事であれば、高度な仕事にみえても将来は A.I.（人工知能）に代替されてしまうであろう。それでは、A.I. に代替されないような普遍的な能力やスキルを身につけていくためには、何が必要か。

そのカギとなるのが本書のテーマである、「性格スキル」である。性格スキルという言葉を聞いて、皆さんはどういう印象を持たれたであろうか。「性格というのは生まれつきのものでしょ？ スキルというぐらいだから人生に役に立つの？」。

性格はもちろん、生まれつき受け継いだものもあるが、性格スキルは変えることができる。それも大人になつてからも、そして年をとつてからも。

職業人生のパフォーマンスを決める要因としては、高度で複雑な仕事であれば、確かに「頭の良さ」（認知スキル）がより重要になる。しかし、職業にかかわらず重要な決め手になるのは、むしろ性格の力ともいうべき性格スキルであることが、最近の様々な研究で明らかになつてきている。つまり、人生 100 年時代、性格をスキルに見立てて、大人になつても伸ばしていくことができれば、どんな道に進もうとも人生

が開けていくのだ。

本書で性格スキルと呼んでいるものは、心理学、経済学で非認知能力 (non-cognitive ability) と呼ばれてきたものだ。これは心理学の世界では5つの因子（ビッグ・ファイブ）に分解できることがコンセンサスとなっている。それらが組み合わさって性格が形成されていると考えるわけだ。

第2章で詳しく述べるが、ビッグ・ファイブとは「開放性」、「真面目さ」、「外向性」、「協調性」、「精神的安定性」の5つである。中でも、やり抜く力を含む「真面目さ」が、人生に大きな影響を与えることがわかつている。この「真面目さ」をどう養っていくかが本書の主題の1つでもある。

以下、本書の構成を紹介しよう。第1章では、性格スキルの重要性を就活などの例から紐解きながら、性格スキルが重要な役割を果たす具体例を紹介する。

第2章では、性格スキルを前述のビッグ・ファイブという5つの因子に分け、職業人生、寿命・健康、犯罪、学歴・成績・学力テストの分野に分けて、どのような因子がそれぞれの人生の分野に影響を与えるかをみていく。そして、人生に重要な性格ス

キルは大人になつても伸びることを確認する。性格スキルの具体的な内容を真っ先に知りたい読者は第2章から読み始めても良いであろう。

第3章では、性格スキルを伸ばすために必要な家庭環境、学校の教室での取り組み、課外活動（特に運動系）の役割を検討する。そして、第4章では就業期以降、職場や就業支援で性格スキルを鍛えるためにどのような取り組みが有効か、日本の雇用システムの枠組みの下でのインプリケーション（含意、結果として生じる意味）も含めて考える。

最後に、第5章では、筆者の勤務する大学での少人数授業（ゼミ）における性格スキル向上の取り組みを紹介したい。それでは、性格スキルを知る旅へ向けて、ボン・ヴォヤージュ！

目 次

はじめに 3

第1章 性格スキルは学歴や職業人生を左右する

第1節 「性格スキル」とは何か? 16

認知能力と非認知能力／非認知能力＝性格スキルは伸ばせる

第2節 就活の成功は何で決まる? 19

大企業の採用——大学文系の場合／あいまいな“人物”的評価／「逃げ恥」／「コラム1」／なぜ有名大学の体育会が就活に強いのか／性格スキルのバランス／なぜ有名大学の体育会が就活に強いのか

第3節 性格はスキルのように伸ばせるか？³¹

10代以降でも伸ばせる性格スキル／性格スキルと認知スキルの関係

第4節 学歴や職業人生は性格スキルで決まるって本当？³⁴

性格スキルを伸ばす幼児教育——「ペリーー就学前計画」の成果／性格スキルで劣るアメリカの高校卒業資格取得者／性格スキルが職業人生に与える影響／責任、眞面目さ、自己管理——性格スキルを重要視する企業

〈第1章・注〉⁴⁹

第2章 ビッグ・ファイブが人生を決める——5つの能力の影響[…]⁵¹

第1節 性格スキルを構成するビッグ・ファイブ[…]⁵²

ビッグ・ファイブのそれぞれの特徴

第2節 ビッグ・ファイブでみた性格スキルの人生への影響 57

性格スキルと仕事の成果の関係／「真面目さ」と並んで重要な「精神的安定性」／日米で異なる性格スキルの影響／性格スキルと寿命・健康・犯罪との関係

第3節 性格スキルと学歴・成績・学力テストの関係は？ 66

学歴との関係／成績との関係／共通学力テストとの関係

第4節 性格スキルは人生でどのように変化していくか 70

年齢によるビッグ・ファイブの変化の違い

第5節 ビッグ・ファイブで最も重要なのは？ 72

人生の成功の切り札「真面目さ」／ダックワース著「やり抜く力」／「真面目さ」「やり抜く力」の重要性を証明するエピソード／〈コラム2〉1970年前後のTVアニメと「やり抜く力」／〈コラム3〉自分を振り返る——人生の転機と「やり抜く力」

第3章 性格スキルを伸ばす家庭環境と教育

第1節 幼少期の家庭環境の影響 96

性格スキル、認知スキルを高める親の投資

第2節 就学期の学校（教室）での取り組みの影響 98

学校時代の素行と将来の賃金の関係

第3節 就学期の課外活動が性格スキルを鍛える 100

運動系活動の効果／リーダーシップの経験の効果

第4節 日本における家庭環境の影響は？ 107

幼少期の家庭環境は学歴、雇用形態、賃金へどのような影響を与えるか

第5節 家庭環境が恵まれていなくても、人生は取り戻せる

112

性格スキルは大人になつてからでも伸ばせる／〈コラム4〉
独学をやり抜いた建築家 安藤忠雄氏／〈コラム5〉天才
長嶋茂雄氏の原点／〈コラム6〉吃音（ちゆう）を克服した稀代の政治
家 田中角栄氏

〈第3章・注〉

126

第4章 性格スキルを鍛える職場と就業支援

第1節 徒弟制度でみる性格スキルの鍛え方

若者が親方から指導や助言を受ける仕組み

130

第2節 職場で鍛えることのできる性格スキル

133

就労期で伸ばすことのできる性格スキルは何か／就職は性格
スキルを大きく伸ばす転機／〈コラム7〉あがり症を乗り越

129

えたコメディアン
萩本欽一氏

第3節

日本の雇用システムにおける性格スキルの位置づけ

140

日本の雇用システムの基本的な特徴／やはり重要な「眞面目」さ／OJTと性格スキル養成の関係／転勤と性格スキル養成との関係／長時間労働と性格スキル養成との関係／性格スキルへの逆風——ブラック企業、パワハラ

第4節

性格スキルを鍛える職業教育・訓練

156

職業実習制度（デュアル・システム）の効果と性格スキル／なぜ政府の職業教育・訓練政策が成果を挙げられないのか／日本版デュアル・システムの登場

〈第4章・注〉

166

第5章 性格スキル向上への挑戦——少人数大学教育（ゼミ）の

現場から

第1節 ゼミを始めるに当たつて考えたこと

168

教育に「正解」なし／学問の習得と性格スキル習得の向上は
両立する

第2節 性格スキルを伸ばすためのキーワード——「成長」

172

本当の「自分」の姿をみつける

第3節 職業人生に必要なことがすべて詰まっているプレゼン テーション

175

なぜ、プレゼンテーションが重要なのか／「真面目さ」を高
める取り組みと「開放性（好奇心）」を高める取り組み

第4節 どんな想いを抱いてゼミに入ってきたのか

179

人前でしゃべれるようになりたい／成長に「線」を引きたく

167

ない／中途半端な自信やプライドに別れを告げたい

第5節 ゼミで得たものは何か 185

やり抜く力と自己規律／社会人に必要な力／無知、未熟さと
向き合う／ゼミ生同士の刺激と学び／「素顔」の自分に向き
合う／お互いを認め合うことによる仲の良さ

第6節 再び教育とは 198

筆者自身に起こった変化／自ら実践的に学んだこと——もう
一人の「学生」と向き合う

おわりに

208

参考文献

214

第5章

性格スキル向上への挑戦

—少人数大学教育（ゼミ）の現場から

第1節 ゼミを始めるに当たつて考えたこと

教育に「正解」なし

本章では性格スキルを鍛える実例として筆者が勤務する大学での研究会、つまり、ゼミの取り組みを紹介することとした。筆者は、2012年から慶應義塾大学に専任で勤務し、大学教育にも本格的に携わることになった。それまで大学院では慶應を含む数校で授業を担当した経験があつたが、学部（商学部）の少人数のゼミを担当するのは初めてであつた（ちなみに、ゼミの研究分野は比較制度分析〔資本主義経済の中で、なぜ多様な制度が生まれるのか〕を理解することを目指した経済学の一分野）である。2018年1月現在、14人のゼミ生が在籍しており、週2で授業が行われている。

筆者の出身は理学部数学科であったので、ゼミといつても4年生の1年間、自分を含めて2人、毎週、交代でプレプリントの教科書を発表し、コメントするだけというとてもシンプルなものだった。卒論もなく、文系のゼミがどのようなイメージで行わ

れるのか皆目見当がつかなかつた。幾人かの同僚の先生に聞いて、基本的なイメージはできたものの、何が望ましいのか、どうあるべきかを考えると「もやもや」が残つたことを思い出す。

大学の授業というものは、そもそもというか当然のことながら指導要領もなく、教員の裁量に任されている。授業のやり方で「後ろ指」を指されるようなケースは、極端にいえば、基本的にはないのだ。そのため、標準化、マニュアル化、ベストプラクティスの収集・周知ということには小・中・高校、塾、予備校と比べても最も遠いところにあるといえる。そうであれば、各教員は自分が受けてきた大学等の時の経験を頼りに行うしかない。

このように、霞が関、国際機関、研究機関を経て、以前から非常勤での講義の経験はあつたものの、専任で大学教育を担当することで初めてわかつたことは、教育にもあらかじめ与えられた「正解」はないということだ。

教える側からすれば、それは誰から教わるのではなく、自分で「正解」を求めて悪戦苦闘する、それでも永遠に「正解」にたどり着くことはないのだろうが、その悪

戦苦闘するプロセスそのものこそ教育ではないかと思ひ当たるようになつた。

本章では性格スキル取得の実践編として、個人的な経験であるが、こうした試行錯誤の経験を紹介してみたい。したがつて、自分のゼミの取り組みが素晴らしい、理想的であるから是非紹介したいなどとはまったく思つていなことを読者の皆様にご理解願いたい。

学問の習得と性格スキル習得の向上は両立する

大学教育に従事するに当たつてまず考えたことは、大学というのは高度な学問を体系的に学ぶ場であることはいうまでもないが、学生を社会へ送り出す重要な責任を負つてることから逃げてはいけないということだ。小学校から高校までの教育は基本的に、より上級の学校に進むための準備という性格が強い。もちろん、職業高校などは例外であるが、社会との接点という意味合いが一番強いのが大学であり、それがそれまでの教育段階と異なる点であろう。

このように考へると、これまで論じたように性格スキルを研究対象としてきた身に

とつては、大学は学問を教えるだけではなく、性格スキルを伸ばし、鍛える場であるべきではという思いが強くなってきた。その際、問題となるのは、学問の習得と性格スキル向上との関係である。これまでみてきたように認知スキルと性格スキルは必ずしも代替的ではなく、補完的な部分もある。つまり、学問を習得することと性格スキルを分けて考えてはいけないのだ。

このため、「学問の習得・探求と性格スキル向上は両立する。大学はひとりよがりな「学問」を教え、「弟子」を作る場でもなければ、就活のための「予備校」でもない。大学でやるべき学問を追求することで性格スキルは伸ばせる」。このような思いを胸に秘め、ゼミをやってみようと決意したのである。

性格スキルの中でもこれまでみてきたように「やり抜く力」、「規律」といった概念も含む「真面目さ」を鍛えることが最も重要なとなる。しかし、これは例えば、学生に「こういう性格スキルが重要だ」と説教をしても伸びるというものではない。むしろ、結果的に伸びるという環境が重要だ。

第2節 性格スキルを伸ばすためのキーワード——「成長」

それでは、具体的にどうすれば良いのか。大事なことは、大きな目標設定と方法論である。何を目指すのか、それをどのように達成するかという視点である。

ゼミの目標設定は「成長」というキーワードで考えた。他人と比べて優れている、劣っているということではなく、「これまでの自分と比較してどの程度、成長したか」を問うというコンセプトである。つまり、他人と比較するのではなく、過去の自分との比較である。

他人との比較であれば、「どうせ自分は生まれつき頭が良い誰々にはかなわないよな」と簡単に言い訳ができる。しかし、比較の対象が自分自身になればそういう言い訳はいつさいできなくなる。自分が努力するところに追い込む手段として「成長」というキーワードは大きな力を持つと考えた。

また、成長したかどうかを第三者が判断するのではなく、自分自身が実感するこ

と、また、実感できることが大切な点だ。そうした成長体験を持つことこそが「眞面目さ」という性格スキルを身に着けることにつながるからだ。他人の評価ではなく自分自身で確信し、納得することで初めて成長体験が血となり、肉となる。それでは、「成長」を実現するために何が必要か。

本当の「自分」の姿をみつける

第一は、認知スキルでも性格スキルでもよいが、自分のレベルを正しく理解することである。今の自分と将来の自分のレベルを自分で正確に認識できなければ、自分自身で成長を確かめることは不可能だ。問題はプライドが自分の本当のレベル、すなわち、未熟さや無知を知ることを邪魔していることだ。成長は「自分はたいしたものではない」と認識・理解することから始まる。「無知の知」といつてもいいだろう。

ある種、「底」にたどり着けば、あとは「浮上」するだけで成長は難しい話ではない。しかし、自分の「プライド」が邪魔して自分の本当の姿を見失つていれば、いくら頑張っても達成感を得ることは難しい。「ちっぽけなプライド」を完膚なきまでに

粉碎することがなにより大切だ。

このため、「わからないのにわかつたふりをするな。わからないことは決して恥ずかしいことではない、わからないことを『まかす』ことが一番恥ずかしい」ということを理解してもらうことがまずゼミの第一歩と位置付けた。

それは自分から逃げずに自分と向き合うことをも意味する。自信をなくしたり、劣等感に悩むということではない。他人のアドバイスも受け入れながら自分と向き合うためには、根底で素直な気持ちを持つことが何よりも大切だ。飾らない素直さを持ち、自分を『まかさず、自分から逃げずに自分と正面から正直に真摯に向き合う心を持つことで、成長する環境が自然と整うと考えられる。

第二は、自分の成長にあらかじめ「線」を引かないということだ。素直に自分と向き合う心構えが成長していくための第一歩になるが、大きな成長をするためには成長に「天井」を設けてしまうような要因を取つ払うことが必要となる。

これは秀才、優等生に多いのだが自分で自分に「線」を引いてしまう学生がいる。「これぐらいやれば成績はA(優)を取れるからこの程度でいいや」と考えてしまう

タイプである。それでは成長はおのずと制約され、達成感も十分とはいえない。自分で「線」を引くことは自分で限界を作っていることと同じことだからだ。圧倒的な成長を目指すためには、自分の取り組みに「線」を引いてはいけないのだ。

第3節 職業人生に必要なことがすべて詰まつている プレゼンテーション

なぜ、プレゼンテーションが重要なのか

次に、成長を実現するための方法論を考えてみたい。学問、勉強に一生懸命取り組むことで性格スキルを伸ばすことは可能なはずだが、そこで問題となるのはどういう方法論をとるかということだ。

ゼミで最も重要視しようと思ったのはプレゼンテーションである。何かを完全に理解しているかどうかを確かめるためには、人前でそれを説明することが最善の方法である。実際、自分は理解していると思っていても、人前で話すことで実はあいまいな

理解であつたことがわかる場合が多い。

また、プレゼンを行つた後、質問に応答したり、議論することでさらに内容を深めることも可能だ。そのプロセスを通じて自分がどの程度頑張れたのか意識できる。もちろん、他人からの評価も受けることでその客観性も高まる。達成感を感じることができるという意味でも「やり抜く力」を鍛えることができる。

報告の内容を完璧に理解するという意味でプレゼンテーションを行うことは有用であるが、それだけが目標ではない。聞いている人に伝えるためには、自分の理解を超えて聞く人側に立つて考えるという配慮が必要だ。また、質疑応答を人前でスムーズに行うためにはある種の度胸、精神力もなければいけない。思つてもみない質問を受けて、頭が「真っ白」になりしどろもどろになることは社会人になつてもよくあることだ。そうした胆力^{はんりょく}を養うことも大切だ。

さらに、プレゼンテーションの資料の提出に当たつては、プレゼンの前日の17時までに全員で共有することを厳格なルールとしている。もちろん、これが守れなければゼミの運営に支障が生じるわけではない。しかし、これもしつかり守ることが「眞面目

目さ」、「自己規律」といった性格スキルを養うことになる。

「真面目さ」を高める取り組みと「開放性（好奇心）」を高める取り組み

ゼミでの内容的なことを言えば、学問を徹底的に身に着けるためには、1冊の教科書をすみずみまで完璧に理解するということがまず最低限必要だ。比較制度分析・応用ミクロ経済学を標榜^{ひょうばう}しているゼミということで、ゲーム理論・情報の経済学の日本語の教科書と、欧米のMBAコースで使用されている英語の教科書（経営者のためのミクロ経済学、組織の経済学）の2冊を教科書としており、2年間をかけて細かい部分を含め徹底理解を目指している。こうした取り組みは性格スキルの「真面目さ」の習得に役に立つと考えられる。

一方、ゼミでは、現実の経済社会の接点を重視し、時事問題に強くなるためにも、日本経済新聞の「経済教室」（朝刊で平日掲載される、有識者が3000字弱で書く政治経済の論考）とイギリスの週刊誌「Economist」をプレゼンの題材として取り上げている。いざれも社会人、ビジネスマンでさえも読みこなすことは難しく、学部学生に

はハードルが高いのは事実だ。

昔であればこうした教材は使うことができなかつたかもしだい。しかし、今は何でもインターネットで調べることができる時代があるので、自分の好奇心に任せてわからることを理解するために、必要なことを徹底的に調べることが可能である。

必要な知識や手法を一つ一つ積み重ねながら理解できることを目指した教科書は、学生が取り組みやすいことは事実だ。しかし、社会に出ればまったく知識がない分野も速習して、いっぱしの専門家のごとく対応しなければならないケースも出てくる。前提となる知識がなくても、理解していくために必要最小限な知識をゲリラ的に得ていくといった、がむしゃらな姿勢も必要だ。

その際、自分の取り組みに「線」を引かず、好奇心に任せてどこまでも調べて、探究することも可能だ。そうすることで、ビッグ・ファイブの中の1つである「開放性（好奇心）」を養うことができる。もちろん、質の高い情報を選別していくという課題はあるものの、インターネットは大人になつてから伸ばすのが難しいとされてきた知的好奇心などの「開放性」を伸ばしていく上で、かなり革新的な役割を果たしつつあ

ると考えられる。

第4節 どんな想いを抱いてゼミに入ってきたのか

このような取り組みをすることによって、ゼミ生にどういう変化が起こったのか。

ここでは教員としての評価や印象を語るよりも、卒業していった元ゼミ生の声を紹介したい。ゼミ生には4年生最後のゼミで、それまでのゼミでの自分の取り組みの振り返りを簡単に紙にまとめてもらうとともに、全員の前で一人一人発表してもらっている。ここではそこから主に引用しながら彼らの変化について述べたい。

まず、彼らがゼミで何を学んだかということを述べる前に、どのような想いや目標を持つてこのゼミに入ってきたのかについて触れてみたい。最後の時になつてどのようないでこのゼミを志望したのかということについて赤裸々に語るゼミ生も多い。

人前でしゃべれるようになりたい

まず紹介したいのは、プレゼンが多いゼミということで人前で発表をしたり、自由な意見を言うのが苦手なことを克服したいという強い気持ちだ。以下は、元ゼミ生の声である（元ゼミ生の「ゼミ振り返り」などからそのまま抜粋）。

「プレゼンに関して言うと、自分は元々多くの人の前で喋る機会がほとんどなく育つってきたからか（自然と避けてきたのかもしれません……）、プレゼンがすごく苦手な方でした。英語に関してはそもそも会話をする機会がなかつたので更に苦手です。」

「このゼミを志望した一番の理由は、昔から抱えている「注目されることが大の苦手」という自分の嫌いな部分に向き合うためでした。昔から人前に立つのが異常なほど苦手で、高校や大学で克服を試みたもののために、でもやっぱり克服したく、発表機会の多いこのゼミで何とかしたい思いが強くありました。」

「発言なんて一度もしたことなくて、みんなに気を配る余裕もありませんでした。それでも唯一勇気を振り絞って意見を言つたら、わけのわからないことを言つてしまい、プレゼンターだった同期にフォローされるという結果に。でも、今考えるとそれが私の『変わりたい・成長したい』という気持ちの表われの最初の一歩だったのかなと思います。」

もちろん、こういう気持ちを持つて入ってきたことはゼミ在籍時に指導教員である私も知ることになるのだが、自分の弱い部分から目をそらさず、諦めず、粘り強く取り組む姿に教えられることも多かつた。

成長に「線」を引きたくない

第二は、自分の成長、努力に「線」を引きたくないという気持ちだ。また、これまでは、要領の良さでやつてきて、必要最小限のことしかやらない自分を変えたいという気持ちだ。まさに、性格スキルの中でも「面白目さ」「やり抜く力」を得たい

という思いを胸に秘めゼミに入ってきたということになる。実は、前述した「成長に『線』を引かない」というコンセプトは以下のように、ある1期生から教えられたことだ。

「ゼミに入るにあたり意識していた1つは境界線を決めずに一生懸命に取り組むことでした。当時は、とにかく成長したいという欲求がとても強かつたのを覚えていました。大学に入る前までは、常に忙しく毎日に追われていましたが、大学に入り、またたりした生活を過ごしてきたことに段々飽きてきたのかもしれません。そのため、これまで勉強にしてもスポーツにしても、ある程度で満足していた状況を変える、良い成長の機会としてゼミに取り組もうと考えていました。」

そうした取り組みに共感して志望してくれた人もいる。

「今まで私は全力を出し切った経験というのがあまりなく、何でも時間と労力をかけ

ずにほどほどにこなすという癖がついていました。悪い結果が出たとき、後悔する原因になつたり、もつと頑張つていればできたという逃げ道になつたりしていました。そういう自分の子どもっぽい部分を変えて、頑張つたと思えることをつくりたいという思いがあつたと思います。」

「このゼミを選んだのは「自分の活動に線引きをしない」というキャッチコピーに、魅力を感じたからです。恐縮ですけども、「人並み程度のモノ」をそこそこの効率で作る、ということは自分はそんなに苦手ではありません。ところがめんどくさがりを極めすぎてしまい、それ以上のために努力し「続ける」モチベーションが、どうも欠けています。そうやって自分の活動に対しても必要最低限以上を求める考え方を、周囲から「どうしていつもそうなんだ」と言われ、自分でも改めるべきかも……と感じていたので、ゼミで自分は変わろう！ という意気込みを持ちゼミ活動をスタートさせました。」

中途半端な自信やプライドに別れを告げたい

第三は、自分の中途半端な自信やプライドに別れを告げたい、粉碎したいという気持ちだ。

「私がゼミを選ぶときに決定的だった先生の言葉は、「みなさんには、たくさん恥をかいでもらいたいと思います」というようなニュアンスのものでした。中途半端に自信と不安を持つたその時の自分には、一番必要なことだと感じました。また、恥をかくということには、人の言葉を聞き入れる素直さも含まれていると思います。もし、これくらいでいいだろう、と自分で基準を作つて現状に満足してしまうと、他人から指摘されたとしても聞き入れる気にならないし、成長の余地もなくなつてしまします。このようなことを、ゼミ活動を通して学生に伝えようとされている先生を見て深く共感したとともに、ゼミで先生やゼミ生とともに学ぶことが、自分の根っこを整える最後のチャンスだと思いました。」

第5節 ゼミで得たものは何か

ゼミ生が2年間のゼミ生活で得たものは何か。彼らの振り返りをみると、プレゼンがうまくなつた、経済学の考え方・知識が得られた、英語がうまくなつたという表面的なことだけでなく、どのような部分で自分が人間的に成長できたのかということを語ってくれる人が多かつた。

やり抜く力と自己規律

まず、第一は、性格スキルの「真面目さ」に含まれる「やり抜く力」や「自己規律」が鍛えられたという声である。

「ゼミの2年間を回視した際、浮かんできた言葉の1つが『言い訳のきかない克己』です。克己心とは自制心という意味で、全体としては衝動や欲望を抑えて今自分

が何をするべきなのかということに集中して取り組めば、自ずと結果はついてくるという意味です。ゼミは個人プレゼンを主軸としたスタイルで、自分の裁量次第で全てが変わるという、ある意味では楽な一方、本気でやろうと思った場合はとてつもない労力がかかる環境だと考えていました。成長と克^{おの}心は組み合わさつて軸となり、やつと車輪が回り始めるものであると考えていた私は、プレゼンや予習のクオリティの上限を自分で定めることなく取り組みをしました。」

社会人に必要な力

第二は、ゼミで養われた力は結局、社会人としてやつていくのに必要な力であるという気づきである。これは性格スキルを鍛えるという方針からすれば自然な帰結であるが、それをゼミ生である時にどの程度意識できていたかは個人差があつたよう思う。

「ゼミの特徴は『自分の成長』をゼミの最大の目標として置いているところです。自

分としては、それを「社会人としての（社会人になるための）基礎力」をしっかりと身に着ける事、と捉えています。「社会人としての基礎力」とは①「物事を理解し、わかりやすくまとめ、口頭で・書面で、簡潔に説明すること」、②「考える際の軸をもつて、建設的・客観的な議論ができる」と、③「やるべきことを、期日までに、しつかりとやりきること」、この3点が挙げられると思います。このゼミでの勉強・活動はいろいろありますが、すべてに共通しているのは「社会人としての基礎力」を必要とし、それを鍛えるものであつた、という点だと思います。」

また、あるゼミ生は、就活について以下のように語っている。

「面接に関しては、ゼミでの経験が役に立つたなど実感しました。面接が進んでいくにつれて、質問やツッコミも厳しくなります。そこで、わからないところを明確にすること、わからることはちゃんと根拠を持つて語ることが求められます。最終面接に近づくと、面接官はなんですか？ なんでですか？ を100回くらい繰り返してきます。しつか

りとロジックを持つて語ることができれば、必ず通ります。面接において大切にしていたのは「根拠のある自信」、「素直さ」、「向上心」です。」

また、別のゼミ生は、就活の経験を以下のように語っている。

「就活における選考を進めていく中で感じたことは、「ゼミで学んだ姿勢は、就活でも確実に生きる」ということです。僕は2社の最終面接で、非常に答えるのが難しい質問をされました。その際に、本当にわからなかつたので「申し訳ありません、わかりません。しかし、それでも」と思います」と正直に話しました。その時に『正直でいいですね、君の良さですね』というお言葉を頂きましたし、実際にその2社から内々定を頂くことができました。正直2年前の僕なら、知つたかぶりをして変なことを答えていただろうなと思います。「自分を飾らず、正直に」という姿勢は、この1年半を通じてゼミで学んだ姿勢だったので、この姿勢は就活、さらにその後社会に出ても大切にすべき姿勢なのだと感じました。」

就活は職業生活のある意味、縮図である。そこでは当然、性格スキルがモノを言うということについて身をもつて経験したということであろう。

無知、未熟さと向き合う

第三は、自分の無知、未熟さに気付いたという声である。

「自分がゼミで得たことを一言で表わすと『無知の知』です。『わからないこととわかっていることとの境界線をはつきりと認識した上で、知的好奇心を持つて取り組む』というゼミで培^{づらか}った姿勢を持つてさえいれば、人生のあらゆる壁は乗り越えられるのではないか、とすら感じています。」

「ゼミで学んだことは数え切れない程^{ほど}たくさんありますが、その中でも最も重要な一つは、【自分は未熟である】ということだと思いました。間近で他のゼミ生のすごい

ところを見ることができ、ようやく自分が本当に未熟であるということを実感しました。」

やはり、中途半端な自信やプライドを捨て切つてようやく本当の意味での成長が始まるということを、身をもって示してくれた例である。

ゼミ生同士の刺激と学び

また、上記のように自分の成長を摸索していく上で、同じゼミ生同士からの刺激や学びがかなり大きいことも、私自身ゼミを指導することで初めて痛感した点である。

実際、お互いが刺激し合い、勉強へのモチベーションを高める効果はやはり大きい。また、以下のように一緒に学ぶことで、学ぶ内容の量・質が高まるという視点も重要だ。

「この2年間を思い返して、ゼミで得られたものの一番に据えたいものは『人と学びあえる環境って素敵だな』ということです。それが、ゼミのみんなと勉強していく中で、人と議論することで得られる学びの多さ、深さがあるのだと気づくことができました。」

さらに、個人の成長をつきつめていく中で、ゼミ全体のパフォーマンスに目を向けることができたゼミ生もいる。

「自分の成長のためだけ」を考えて、最初の一年間を過ごしました。しかし、二年目は、「自分の成長を考えているだけではダメだ」と思うようになりました。「ゼミ全体の空気感・雰囲気」を大事にしようと思つて一年間を過ごしました。」

「3年生の時は、自分のプレゼンをきちんと伝えようということばかりに集中していました。けれども最後の発表の直前になつて、何も自分一人で完璧なプレゼンを目指しました。

す必要なんてないし、みんなから意見をもらつて、ゼミ全体でいいプレゼンをしたいな、というふうに意識が切り替わりました。」

一方、勉強の中身や知識よりも、個性や取り組み方といった人間的な面、これは性格スキルといつてもよいであろうが、そこから刺激を受けたり、気づきが生まれる場合も多い。

「自分とは違つた価値観を持つ、良い意味で個性的な人々に会えて知識などとは別の視野も広がつたのではないかと感じます。」

こうした気づきは、性格スキルのビッグ・ファイブの観点からは「協調性」が養われたと評価できるかもしれない。しかし、ゼミの取り組みを振り返れば、ビッグ・ファイブの「真面目さ」、「開放性」、「協調性」は相互に補完し合いながら伸びているのではという思いも強くなつた。もちろん、ゼミ生同士の刺激・学びだけでなく、指導

教員である私とのやり取りが転機になつた例はある。

「4年になつてすぐの先生との面談で、わたしの取り組みの姿勢について突かれました。先生から『周囲との比較じゃないよ、自分自身の成長を大切にした方がいい』と指摘されました。このゼミの真骨頂しんこつちようを、忘れてはいるよと言われた気がしました。」

こうしたゼミ生への働きかけはやはりタイミングが重要だとも、ゼミを通じて学んだことの一つである。年がら年中、「ああだ、こうだ」と指摘されれば、ゼミ生にとっては指導教員は口うるさい親と同じでうんざりしてしまうだろう。本人の中でも気づきが熟してくる過程が前段階として必要で、最後の一押しという役割が大切だ。

【素顔】の自分に向き合う

以上のような声だけ紹介すると、うまくいつたことばかり書いているのではないか

と読者は不審に思われるかもしれない。ゼミの振り返りでゼミ生が語っていることを一言で言い表わせば、「素顔」、「裸」、「等身大」の自分である。最後のゼミであれば、予定調和的に終わりたい、話を盛つてカッコつけたいという思いは誰もあるはずだ。しかし、彼らの話を聞くとまったくそういうところがない。自分ができたこと、できなかつたことが非常に客観的に評価されているようにみえた。ゼミの考え方があながら浸透していると感じた時でもあった。

特に、やり抜く力など「真面目さ」という性格スキルの取得が重要であることはゼミ生は自身で感じていただけに、もつと身に着けるべきだったとの反省もみられた。

「達成感はある程度あります。しかし自分の弱点である、「やりきる」ことができない点は結局ゼミでは克服出来ませんでした。」

さらに、自分の成長を超えたゼミ全体への配慮への反省の言葉もあつた。

「2年間のゼミを終えた今、当時の目標を達成できたかというと、残念ながら反省のほうが多い気がします。具体的には、運営や後輩との関わりなどでゼミに貢献する姿勢が欠けていたことです。」

自分の足りないところと嫌なところを改善したい、克服したいと思つてゼミに入ってきたが、道半ばということを正直に語つてくれたゼミ生もいた。

「2年を通して唯一心残りなのはいいプレゼンが結局できなかつたことです。4年になつてだいぶましにはなりましたが、完治するにはやっぱり生まれ変わるしかないと痛感しました。」

しかしながら、指導教員の目からみればはつきり変わつたなと思えるだけに、自分に対する厳しい目を養えたという意味で、彼らの真の成長を実感することができたと思う。

お互いを認め合うことによる仲の良さ

ゼミ生に起こった変化として最後に述べたいのは、ゼミ生の仲がとても良くみえることだ。これはゼミを始めてみた当初は思つてもみなかつたことだ。プレゼン主体のゼミというと個人主義的な考え方の人が多いというのは否定できないかも知れない。しかし、ゼミのモットーとして、「オンとオフのモードの切り替え」を大切にしている。ゼミ活動でも飲み会やレクリエーションなどのオフの時は徹底的に楽しむことにしている。それがゼミ全体の「明るさ」、性格スキルのピッグ・ファイブで言えば、「外向性」にもつながつていそうだ。

また、前述のようにゼミをやつしていく中で変わつていくというプロセスがあつたようと思われる。「成長」という共通の目標・価値観だけでなく、お互いの個性、自分にはない長所を認めあつていいからではないだろうか。飾らない素顔の自分をみせるということとも、親密感を増すことにつながつているのかもしれない。

よく、「裸の付き合い」が打ち解けるきっかけになるといわれるが、むしろ、ここでは「心」を裸にした付き合いと呼べると思う。厳しい環境の中でもみんなで一緒に

温泉に入っているような居心地の良さを感じているのかもしれない。仲が良い、樂しいというのは本当にそうなのか確認しようがないといえばそれまでだが、写真は嘘はつかないと思う。このゼミを志望してくれる学生には、「ゼミのホームページの各種活動の写真をぜひ見て、その目で確かめてください」と言っている。

でもそうした環境は、実は簡単に得られるものではない貴重なものと認識していたゼミ生もいた。

「ゼミには学ぶためのいい環境が備わっていたのは間違いないのですが、いい環境だったから頑張れたのではなく、今後どんな環境でも頑張れる人間でいられるようというのが人生における試練なのかなとも思っています。」

第6節 再び教育とは

筆者自身に起こつた変化

成長をキーワードにする、そのためにはちつぽけなプライドを粉碎する、人の意見を聞き、自分と向き合える素直な心が必要であるという考えはもちろん自分の人生経験に基づいている。霞が関や国際機関で勤務していた20代、30代の時期はとてもできないと思うような仕事を任されて、それでも、もがき、苦しみながらやり抜いた時に一番成長していたという実感があった。

また、職場も中央官庁、国際機関、公的（またはその色彩が強い）研究機関、そして現在の大学と変わっていったが、その度^{たび}ごとにプライドを一旦粉々に壊して精神的にゼロから出発する大きさを学んだ。だからこそ、若い時にそういう経験を積むことが大切と強く感じていた。

そうした自分の若い時の経験は、ゼミ生のような若者には重要なメッセージとなる

と考えていたが、通常の企業勤めであれば定年（60歳）もあと数年であるわが身の問題として捉えるという発想はまったくなかつた。

しかし、ゼミを始めて最初に入ってきた1期生が卒業する時に、それぞれの中身は異なるけれど、自分の設定した課題に向かって成長を遂げたこと、中には、「ここまで言つてもわからないのか」とさじを投げそうになつたゼミ生も最後の最後で成長したのをみて、正直、「あー、成長つていいな」、「うらやましいなあ」という気持ちが自然に出てきた。そして、「自分も皆と同じように成長したい……」という気持ちが思いがけず心の底から湧いてきたのだ。

成長したいのであればどうしたら良いのか。それは、当たり前であるが、ゼミ生に常々言つていたことを自分自身へ問いかけていくことであつた。そこで見えてきたのは粉碎したはずの「ちっぽけなプライド」が年月とともに知らない間に蓄積し、「岩盤」になつていたことだ。一番取り組まなければならないことから逃げて、素直に裸の自分に向き合うことを恐れていたのではないか。恥ずかしながら、自分が言つていたことに対する一番耳を傾けなければいけなかつたのは、他の誰であろう自分であ

つたことに気がついたのだ。教えるゼミ生から逆に教わったといえるかもしれない。
それに気づいてから自分の仕事への取り組みにも変化が表われたようだ。

成長は若者の特権のように思われ、自分もそう考えていたが、どんな年代になつても成長は楽しいはずだし、可能なはずだ。これは性格スキルが成人してからもずっと伸ばすことができることも関係しているそうだ。

自分の尊敬する経済学者の一人で、プリンストン大学教授を長く務めた、アヴィニッシュ・シュ・ディキシット氏は自分の仕事のやり方を答えて、「あたかも自分の年齢がずっと23歳のままであるかのようにいつも仕事をすること」と答えている。無名で実績もなく、未知の世界への希望と不安を抱えながらも、無限の成長可能性を信じて、意欲に満ちているのがこの年齢だ。自分もそうありたいと心掛けてきたつもりだが、OB・OGも含めゼミ生とどちらがより成長できるか競い合いながら、どこまでも成長できればと思つている。

自ら実践的に学んだこと——もう一人の「学生」と向き合う

大学でのゼミの活動を中心に、性格スキルの向上を目指す教育のあり方を考えた。そこでおぼろげにわかつてきたのは、教えることは一方的なことではなくて自分がかえつて教えられることだし、学ぶことが伴つてこそ充実したものになるということだ。具体的には、以下、3つの点を指摘したい。

第一は、教えている内容や教えているプロセスそのものが自分が面白いと思い、楽しいと感じなければ、やはり、学生が面白い、楽しいと感じることもなかろう。教育に携わるようになつてこれまでの自分の仕事と異なる点だと思つたのは、繰り返せば繰り返すほどレベルが高くなる、習熟するというものでは必ずしもないということだ。

例えば、大学の授業は、新規の科目は最初の準備が非常に大きな負担になる。しかし、一旦、講義資料を作つてしまえば、次年度以降はそのまま使用できるため一気に楽になる。しかし、学生の反応はむしろ慣れていない初年度の方が良く、教員が慣れれば慣れるほど、むしろ悪くなるように感じた。

これは、初年度は教員自身初めての授業で自分自身も新鮮で面白いと感じながら授業をやっているため、それが学生に伝わるからではないか。一方、慣れてくれば繰り返しになり自分自身も新鮮味や面白味を感じないため、学生にもそれが伝わってしまふのではないか。高校時代の社会の先生の中にはボロボロになつたノートを授業中か細い声でただ読み上げる教師がいた。当然、授業を聞いている生徒はなく、内職のし放題であつたが、結局、本人も教えることを楽しんでいなかつたと思う。

第二は、教えるということは、自分自身も学ぶということである。内容面、精神面でも教えることを通じて自分も成長するということであろう。

例えば、自分の著書、専門分野だけ教えていれば、自分は全部わかっているため、楽ではあるが、教える側にとつての学びは少ない。もちろん、教える以上、自分の理解が不十分、不完全なものを教えることは問題であるが、大学のゼミで時事問題を扱つてているというのも、自分自身も学生と一緒に学びたいという気持ちの表われであるし、それがあるからこそ、教えることが面白いと感じることができるのだ。

第三は、手を抜かないということである。先にも述べたように、教育には「正解」

はないと思う。もちろん、科学的、実験的な手法でどのような教え方が効果があるかを明らかにし、そうしたメソッドを普及させていくことは大切だ。

しかし、そこで大変貴重な知見が得られたとしても、それがあらゆる状況で有効である保証はない。そうであれば、本当の「正解」はないのかもしれないが、できることはよりよい教育を目指して試行錯誤を続けるしかないのではないか。そして粘り強く試行錯誤を続けるにはやはり全力でぶつかる、手を抜かないという気持ちが必要だということを学んだ気がする。

前述したように、本書で自分の教育の取り組みを紹介しているのは、これが素晴らしい、見習うべきだということを言いたいわけではない。教員やゼミ生がたとえ、いいゼミだと思っていたとしてもそれは単なる思い込みで幻想であるかもしれない。

そもそも、ゼミの選考では、このゼミに入つてよかつたと思えるような人を採用している。したがつて、ゼミが素晴らしいと思えるのは、ゼミの効果というよりも最初からゼミ生に備わっていた資質といえるかもしない。経済学の言葉でいえば、「セレクション・バイアス」があるということだ。

しかも、プレゼン主体のゼミであるためどうしても人数が限定されてしまう。志望していても断腸^{だんちょう}の思いで不合格にしなければいけない学生が毎年いる。学生数が多い私大文系のゼミではなるべく多くの学生を受け入れるべきではないかという考え方からすれば、ご批判もあるだろう。

また、そうやって入ってきたゼミ生の中でも、内面はともかく勉強面では目に見える成長が残念ながら実感できなかつた人、ゼミの方針ややり方に疑問を感じ退会した人もいる。うまくいったケースばかりではないのだ。

さらに、認知スキル、性格スキル双方を徹底的に伸ばすために少しでも多くのプレゼンの機会を作ることを念頭に置いたゼミなので、三田祭での展示、合宿、懇親会以外にほとんどイベントらしきものがない。

例えば、他のゼミでは、外部講師を呼んできたり、他大学を含めて他のゼミと交流したり、論文コンテストに参加したり、各種見学を行つたりすることも多いようだ。こうした経験が学生時代のかけがえのない思い出になることは否定しない。実際、ゼミ生の中には、過去、こうした楽しい学習イベントがなく、物足りなく感じる人がい

たことも事実だ。

ゼミとしてすべてを満たすことは到底無理だし、当然、欠点もあるであろう。ただ、教える側からすれば、よりよいものを目指して試行錯誤する、手を抜かない、樂をしようとしている、本気でぶつかるということで、自分の教育はたとえ正解ではなかつたとしても許してもらえればという気持ちだ。自分も指導を受けた先生を振り返つてみると、教えられた内容よりも教えることの熱意というものが自分を変化させ、成長するきっかけを与えてくれたようだ。

結局、自分自身が学び、面白いと感じるということは、教師というのは二重人格の存在ということなのかもしれない。もう一人、学生の立場である自分がいる。もう一人の自分が面白い、学んでいると実感が持てる、やる気が起こるかということを考えながら教えているということだ。ゼミの活動をやっているとたまに、今の自分は教師なのかそれとも分身の学生なのか境界があいまいになることもないわけではないが、学生にも大目に見てもらえればと思う。

そろそろ、性格スキル探索する旅も終わりに近づいた。第5章で述べたことは筆

者のゼミの具体的な取り組みであった。しかし、そこでのキーワードである、成長は性格スキルを伸ばしていく上での普遍的な「魔法の言葉」かもしれない。成長を望まない人はいない。自分の「殻から」を打ち破る爽快感。ちっぽけに見える「昨日の自分」。「成長つていいな」と思える瞬間こそ人生の貴重な時のような気がする。

私たちは少々知識が多くなつたり、頭が良くなつたからといって、自分が成長したとは思わない。人生に対する取り組み方、人とのかかわり方、そして、自分との向き合い方。そこが大きく変わつてこそ成長を感じるのでないだろうか。だから、成長Ⅱ性格スキルを伸ばすこと、であるのだ。最後に、「はじめに」に語った言葉をもう一度繰り返してみたい。

「性格スキルは変えることができる。それも大人になつてからも、そして年をとつてからも」。

〈第5章・注〉

*67 やまと取り組みやこく具体的な内容は鶴光太郎研究会のホームページ、<http://keioshototsuru.wixsite.com/tsuruzemi> 参照。

おわりに

本書を振り返つてみると、第1章から4章までは、これまでのエビデンスや研究に基づく客観的な記述ができるだけ心がけて、現在、性格スキルに関わることがどの程度まで明らかになつてているかを示してきたつもりだ。

一方、筆者自身の大学教育の取り組みを述べた実践編（第5章）はまったく主観的な立場から書いたものだ。第4章までをみても、個人の人生の経験を語ったコラムは当然のことながら主観的な色彩が濃い。第1～4章の本文と第5章及びコラム、両者のあまりのギャップの大きさに戸惑われた読者も多いのではないかと思う。

性格スキルという言葉は、初めて聞いた人にとっては得体のしれないものである。

それだけに、それが人生にどのように影響を与えるのか、また、スキルとして大人になつても伸ばせることを説得的に語る必要がある。そのため、これまで蓄積されたエビデンスを読者にわかりやすく説明することが必須であり、それが本書の最も重要な狙いであるといつても過言ではない。

その一方で、本書が扱っているテーマは広く捉えれば、人生そのものである。単に学術的な成果の紹介だけでよしとはならないであろうと考えた。個々の人生をエピソードとして選べば、そこには恣意性^{じいせいか}が必ず入る。自分の人生を語るのであれば尚更だ。筆者自身もどちらかといえば自分を語るのは苦手な方だ。

しかし、いろいろご批判があつたとしてもそれを乗り越え、具体的な人生を語らない限りは性格スキルの本質を読者に理解していただくのは難しいと考えた。本書のアプローチがうまくいつたかどうかは読者の方々の評価に委ねたいと思う。

本書でも紹介している日本経済新聞の「私の履歴書」をいろいろ読んでみて、一つ気づいたことがある。それは、その道を究めた人ほど意外なエピソードを語っていることだ。それはどちらかというと「かつてこわるいこと」で、ここまで功成り名を遂げた人が今さらこんなことまで語らなくともいいのにという場面にしばしば出くわした。

特に、印象に残っているのが、王貞治氏の「私の履歴書」（2015年1月1日～31日）だ。前人未踏の記録、輝かしいパフォーマンスについての記述は、びっくりする

くらいあつさり通り過ぎる。むしろ、新人として巨人軍に入団後、長嶋茂雄氏と同室となつたが整理整頓ができない、いびきがうるさいということですぐ大部屋に移されたことに始まり、どちらかといえば自身の不器用さやうまくいかないことを多く語つていたように思う。

もちろん、これには謙虚なお人柄が反映されているのである。野球選手でさえ「世界の王」として畏敬する存在である。できるだけ読者に親しみを持つてもらうためにわざと「かつこわるいこと」を語っているのであろうかと思う向きもあるかもしない。

しかし、多分そうではなかろう。選手や監督として頂点を極めるまで、王氏ですら多くの「かつこわるいこと」を経験してきている。だからこそ、栄光を語るのであればそこにいたるプロセスも、逐一語らなければならぬという心境ではないだろうか。

筆者のゼミの学生で、ご意見番的な存在で誰からも認められていた人がいた。彼が最後のゼミの振り返りで、みんなの前で意外なことを告白する。「僕は大学に入る時、

補欠入学でした」。

こんなことを今さらなぜ言うのだろうか……と困惑したのを覚えている。君が優秀で頑張ったことは皆わかっているのに。ただ、すぐ合点がいった。ああ、そうか、そこから始まつたのか。このゼミに来る」とも。そしてここで頑張ることも。自分が成し遂げたことを語るためにはどうしても言わなければならないことだつたのであるう。

人生とは何か。それは、たぶん、

人生＝「かつこわるいこと」×「かつこわるいこと」×……×「かつこわるいこと」×

……

のように「かつこわるいこと」の無限の連鎖なのかもしれない。その連鎖の中に、たまに、「かつこいいこと」が訪れる。でも、それは単なる結果であり、一瞬でしかな

い。もちろん、「終着駅」でもない。また、「かつこわること」の連鎖が始まる。それを受け入れ、楽しむことこそ「眞面目さ」であり、「やり抜く力」なのだと思う。

本書は、拙著『人材覚醒経済』（日本経済新聞出版社、2016年）の第7章をベースにしながら大幅に加筆、修正を加えてまとめたものである。

本書の第3章で引用し、筆者も関わった実証分析（戸田・鶴・久米「2014」）は独立行政法人経済産業研究所（RIETI）で行った研究成果の一部である。「支援いただいたRIETIの関係者、共著者である久米功一氏（東洋大学）、戸田淳仁氏（リクルートワークス研究所）にお礼を申し上げたい。

また、第5章では、筆者のゼミ（鶴光太郎研究会）を卒業した1～3期生のゼミでの振り返り等から、生の声を引用させていただいた。彼らの成長や気づきから自分も多くのことを学んだし、この歳になつて自分も成長することができたのも彼らおかげだ。ありがとう！

本書の草稿については、清水真人氏（日本経済新聞社）、ゼミ生を代表して勝又大喜さんに通読の労をとつていただき大変貴重なコメントを得た。もちろん、ありうる誤

りなどは筆者に帰すべきであることはいうまでもない。

最後に、本書の編集に当たっては、祥伝社の磯本美穂氏にお世話になつた。遅々として進まない執筆に対し辛抱強く待つていただいただけでなく、同じ目線で伴走していただきながら、温かい言葉、励ましをいただいたことが大きな力になつた。特に、自分や自分のゼミを語ることについてその必要性は感じつつも逡巡^{しゆんじゅん}していた時、強く背中を押していただいた。心から感謝申し上げたい。

2018年1月 三田にて

鶴光太郎
つるこうたろう

おわりに

* 68 王貞治（2015）「もっと遠くへ 私の履歴書」日本経済新聞出版社

参考文献

〈和文〉

「田邊」・鶴光太郎・久米功（2014）「幼少期の家庭環境、非認知能力が学歴、雇用形態、賃金に
与げる影響」*RIETI Discussion Paper Series 14-J-019*

鶴光太郎（2006）「日本の経済システム改革—「失われた15年」を越えて」日本経済新聞出版社

西村和雄・平田純一・八木国・浦坂純子（2014）「基本的モラルと社会的成功」*RIETI Discussion
Paper Series 14-J-011*

アーヘン・タックワーベ（2010）「あなたの抜く力 GRIT——人生のあらゆる成功を決める「究極
の能力」を身につける」ダイヤモンド社

〈英文〉

Almlund, M., A. Duckworth, J. Heckman, and T. Kautz (2011) "Personality Psychology and Economics",
in E. Hanushek, S. Machin, and L. Wößmann (eds.), *Handbook of the Economics of Education*, Volume 4,
pp. 1-181. Amsterdam: Elsevier.

Barrick, M. and M. Mount (1991) "The Big Five Personality Dimensions and Job Performance: A Meta-
analysis", *Personnel Psychology* 44(1), pp.1-26.

Barron J., T. Bradley, and G. Waddell, (2000) "The Effects of High School Athletic Participation on
Education and Labor Market Outcomes", *Review of Economics and Statistics* 82(3). pp. 409-421.

鶴 光太郎 つる・こうたろう

慶應義塾大学大学院商学研究科教授。

1960年東京生まれ。84年東京大学理学部数学科卒業。オックスフォード大学 D.Phil. (経済学博士)。経済企画庁調査局内国調査第一課課長補佐、OECD 経済局エコノミスト、日本銀行金融研究所研究員、経済産業研究所上席研究員を経て、2012年より現職。経済産業研究所プログラムディレクターを兼務。内閣府規制改革会議委員(雇用ワーキンググループ座長)(2013~16年)などを歴任。主な著書に「人材覚醒経済」(日本経済新聞出版社、第60回日経・経済図書文化賞、第40回労働関係図書優秀賞、平成29年度慶應義塾大学義塾賞受賞)、「日本の経済システム改革—「失われた15年」を超えて」(日本経済新聞社)などがある。

せいかく
性格スキル
—人生を決める5つの能力

つる こうたろう
鶴 光太郎

2018年2月10日 初版第1刷発行

発行者…………辻 浩明

発行所…………祥伝社 しょうでんしゃ

〒101-8701 東京都千代田区神田神保町3-3

電話 03(3265)2081(販売部)

電話 03(3265)2310(編集部)

電話 03(3265)3622(業務部)

ホームページ <http://www.shodensha.co.jp/>

監修者…………盛川和洋

印刷所…………萩原印刷

製本所…………ナショナル製本

造本には十分注意しておりますが、万一、透丁、乱丁などの不良品がありましたら、「業務部」までにお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。ただし、古書店で購入されたものについてはお取り替え出来ません。

本書の無断複写は著作権法上での例外を除き禁じられています。また、代行業者など購入者以外の第三者による電子データ化及び電子書籍化は、たとえ個人や家庭内での利用でも著作権法違反です。

〈祥伝社新書〉

話題のベストセラー!

逆転のメソッド

箱根駅伝も
ビジネスも一緒に

原 晋

吉山学院大陸上競技部監修

勝ち続ける理由

一度勝つだけでなく、勝ち続ける強い組織を作るには?

知性とは何か

日本を襲う「反知性主義」に対抗する知性を身につけよ。その実践的技法を解説

佐藤 優
著者一元外務省主任分析官
的き方評論家

なぜ、残業はなくならないのか

常見陽平
著者一元外務省主任分析官
的き方評論家

日本を襲う「反知性主義」に対抗する知性を身につけよ。その実践的技法を解説

なぜ、東大生の3人に1人が公文式なのか? おおたどしまさ

見聞・教育ジャーナリスト
著者一元外務省主任分析官
的き方評論家

世界で最も有名な学習教室の強さの秘密と意外な弱点とは?